医療コーディネーターの立場から
生活者と共に在る看護～「最適な距離感」の重要性

嵯峨崎泰子（日本医療コーディネーター協会）

医療コーディネーターは、特別な職種ではない。看護師の仕事そのもの～看護の中核とも言うべき本質部分であり、独立性をもった実践者としての“機能”だと考えている。

施設内であろうと在宅であろうと、常に中立的に冷静に専門性を持って様々な微調整（コーディネーション）をしながら関わる。それは、患者・家族等にとって「最適な距離感」をもってサポートするパートナーでもある。

医療の中に身をおかれた患者や家族等は、そのときから、日常生活を一変する状況を受け止めていかなくてはならない。急激な変化の中で様々な困難を伴う決定をするには、あまりに多くの障壁がある。患者・家族にとって必要なことは最新の医療情報ではない。「共に歩んでくれる専門家」としての医療者の存在である。

自身の過去の医療体験の中で最大の支えとなった言葉がある。次男を極小未熟児で出産し、水頭症の治療決定において医師に言われた言葉。「もし、この診断で治療方針を決定して障害が残ったとしても、彼が自立するまで僕は診ますよ」と。「一人で抱えなくても大丈夫。支えてくれる人々がいる」その時の安堵感は何にも代え難かった。

医療者は家族にはなれない。生涯の責任を負うこともできない。しかし、共に冷静に歩むことはできる。患者・家族を孤独にさせず「最適な距離感」を保ち、状況把握された中で臨機応変に最大限の能力を発揮できる存在であることが求められる。その担当者はアクセスしたとき常に同じ人であればベストであるが、担当者との相性は重要であるから変更可能であるべきだ。まさに独立性をもった看護の醍醐味はそこにあり、同じ時を共有できるならば、生涯に渡り患者・家族は伴走者としての医療者の存在を求めている。

以上